
乙女の世界に飛び込んで --- Second season 『二人の銀の姫』 ---

白い鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女の世界に飛び込んで . . . Second season
『二人の銀の姫』 . . .

【Nコード】

N3108Y

【作者名】

白い鳥

【あらすじ】

PC版「二人のエルダー」に、First seasonの主人公を絡ませる。

と言う無謀な企画により始まる当小説です。

キャラメルBOXが製作したデータを元に、二次創作者が自ら作成したデータ（プログラム・画像・音楽・音声・テキスト等）の使用は問題ありません

とのガイドラインにより、第二段となります。

あらずじ。前作主人公が2年生になって、PC版「二人の〜」のあの人達と絡んだら、どれだけグダグダになるか。

です。

序章 あの人の始まり 第一話

今日の早春の空は淡い瑠璃色だった。

今日は薰子お姉さまとお買い物をする日だった。

所謂ナンパをしている男性と、無反応に見える女性が見えた。

* 瑠璃色

瑠璃色るりいろは、濃い赤味の青。名は、半貴石の瑠璃（ラピスラズリ、英：*Lapis lazuli*）による。

半貴石のラピスラズリを粉碎し精製した顔料は、天然ウルトラマリオンである。

ただし、色としてのウルトラマリブルーを群青色とし、瑠璃色と区別する人もいる。

勿論、瑠璃の色と瑠璃の粉末の色、天然ウルトラマリンの色は異なる。

加工の過程で色合いが変わるのは当然であるが、主要発色成分の化学組成は変わらない。

そもそも、ラピスラズリはそれぞれの色合いが異なり、所謂色名で指定してもその色合いとは異なり、大なり小なりの齟齬が生じる。

瑠璃は、西洋では伝統的に聖母マリアのローブの色として用いられていたが、

日本では藍銅鉱からとれる群青が主流で、顔料としての瑠璃は高松塚古墳にわずかに使われたとの説があるに過ぎない。

宝石としての瑠璃は、シルクロードの終着駅として大陸との交流が盛んだった時期にさえ、天皇など貴族階級のごく一部が宝飾品（正倉院宝物）としてわずかに所有するのみであった。

後にコバルトで発色させた瑠璃色のガラスも混同されて「瑠璃」と呼ばれるようになったが、これはスマルトに近い。

長広舌ぢやうくわしつを振るっている男に対して、何ら反応をしていない銀髪の女性。

あれはいずれ男が手を出すパターンに見える。

「薰子お姉さま…」

つて声を掛ける前に、もうあの女性の方に行ってるし…

男の顔が紅潮し、異様な熱が入ってきた様だ。そろそろやばい。

「てめえ、何時までも無視してんじゃねえぞ」

ついに男は、女性の手を掴んだ。

「ちよつと」

薰子お姉さまが二人の間に割って入った。

「ちよつとやめたら？その子、嫌がってるじゃない」

男が顔を顰めた。どうやら掴んだ男の手を、力を込めたらしい。

薫子お姉さまと男の言いあいになりだした。

止めに入っ たんじゃないの？

仕方なく更に割って入る。

「こんな道の真ん中で、良い大人の男性が、女性と口論ですか？良
いさらし者ですよ？」

そんな事を言うと、男は遠巻きに見ている通行人達の存在に気が付
き、逃げる様に立ち去って行った。

「はあ……」

薫子お姉さまがため息を吐く。

「ごめんね司ちゃん。あと、そちらの方、大丈夫？それとも、余計
なお世話だったかな」

「いえ、助かりました」

女性は一息付いて言葉を続けた。

「助かりましたが、いつもこんな事を？」

「え？まさか……」

「そんな事するから、そう見られるんですよ？だから学院で……」

「あ〜ごめん。ただ、貴女の顔から、SOSが出てる様に見えるから」

薫子お姉さまは女性にそう言う。

「どうしてそう思ったのかは、それは分からないんだけどね。じゃああたしはこれで、行こう司ちゃん」

そう言うって、私の手を握って来た。

「有難う御座いました。それとそちらの方」

女性は私に話しかけてきた。

「はい？」

「同じ銀色なのですね…髪の毛」

「ああ……北欧の方へ行けば結構いると思いますよ？行ったこと無いので知りませんが」

「そうですか…」

話はそこで終わり、私達は買い物を行う事にした。

ほんの些細な出会いだったが、これが彼女との出会いの始まりであった。

序章 あの人の始まり 第一話（後書き）

と言う訳で第二段の始まりです。

第二段も、時間の許す限りお付き合います。

（、（つて「」 飲み物どーぞー

序章第二話

桜が散りだす並木道を、少女達の明るい挨拶や雑談があちこちから聞こえてくる。

「おはよう御座います」

「ごきげんよう」

「今日も良い天気ですねえ」

などなど。

外から見れば、恐らくその光景は純粹で美しく、清清しい。

ここはせいおうじょがくいん聖應女学院。

明治時代に設立された由緒ある女学院。日本の近代文化に合わせ、女性にも相応しい教育を学ぶ場所が必要だ。と言う理念に基づいて設立された。

英国のパブリックスクールを原型とし、基督教的なシステムを取り入れた教育様式は、

現在にまで受け継がれている、所謂、『お嬢様学院』である。

*パブリックスクール (public school)

イングランドおよびウェールズのパブリックスクールは、

イギリスのジェントルマン階層の子弟を養成するものとして、深く

イギリスの社会の中に浸透している。

大部分は寄宿制であり、一流大学進学を前提とする裕福な階層の子ども達が、厳格な規律の下に集団生活を送っている。

自由と規律、公正なスポーツマンシップと互いの尊重など、イギリスの教養ある人士の基本となるものを身に着ける為の学校であるとされる。

この意味でのパブリックスクールはイギリスでもイングランドおよびウェールズのみであり、

同じ国内のスコットランド・北アイルランドでは公立学校を「パブリックスクール」と呼ぶ。

イギリスの「プライベート」は、インデペンデント・スクールのうち、

パブリックスクールに入学するための受験校であるプレップ・スクール(en)

(日本では辛うじて相当しそうなのが予備校。Preparatoryは予備の事)を指す。

これに対して公立学校は地元の生徒のみを受け入れるため「ステート(公立)スクール」と呼ばれる。

* 基督教的なシステム

早い話がキリスト教主義学校である。

学校の管理・運営者をキリスト者とし、聖書やキリスト教を科目として教え、

礼拝などのキリスト教活動を学校行事とすることで、キリスト教の感化を及ぼすことを目的としている。

なお、カトリック系学校はプロテスタント系学校と区別するため、

「カトリック学校」と呼ぶ場合がある。

聖應女学院は戦後再建時に幼稚舎から女子短期大学までの一貫教育施設となるが、

その基本的なスタイルは現在も変わらない。

生徒の自主性を尊重する為、服装規約等の校則はゆるいが、徹底した情操教育の賜物なのか、

生徒内自治がある程度の効果を上げていて、大幅な校則違反は殆どない。

裏を返せば、若干世間から隔絶してしまっている感は否めない。

「おはよう御座います！千早お姉さま、史さん。それに妖精の君」

「なぜ私だけ二つ名なの…」

「う、ごめんなさい。つい…」

「いい加減慣れましたけどね」

「おはよう御座います。今日も良い天気ですね」

似非笑顔を振りまく千早さん。

それでも女生徒達は花が咲くように微笑んでくれる。

私（司）は、立場上は千早さんを『千早お姉さま』とは呼ぶが、個人的にはそうは呼べない。

「それでは私はこれで失礼致します。史さん、又教室で」

「はい。また教室で」

千早さんの横に就いている史さんがそう答え、女生徒が立ち去って行った。

「温室、だわね……本当にここは」

千早さんが独り言の様に呟いた。

「あの……本当によろしかったのですか？」

史さんが千早さんに何かを聞いてきた。

「個人的な事の様なので、私は外しますね」

「申し訳ありません」

何の内容なのかは予想が付く。

あの日、これは始まるべくして始まってしまったのだから……

序章第三話

私が千早さんの正体を知ったのは、彼女が転入してくる直前であった。

初音お姉さまとの所用を済ませ、寮の自分の部屋に戻ると、急に眠気が襲ってきた。

そして夢の中では、天に召された筈の姉が微笑んでいた。

「久しぶりね咲ちゃん」

「姉さん。どうしたのですか今日は？」

「うん……なんて言うか、自分で蒔いた種なのに、その芽を刈り取らずに鬱になりかけて、母親の強固な姿勢に負けたとある男の子がいて、その男の子の心を、ほんの少しでも良いから、咲ちゃんに救って欲しいの」

「私は聖應を止める事になるのですか？」

「ううん。それは無いから大丈夫。だってその男の子、聖應に入学してくるから」

はあ？

姉さんは今何と言った？

… その男の子、聖應に入学してくるから …

「まあ、こんな事言っても信じないよね？でも、聖應には前例があるわ」

「宮小路 瑞穂さん…ですか…」

「うんそうだね。まあ、その男の子が聖應に入る事になる事情を知って欲しいの」

「なぜ私なのですか？」

「貴女は否定するかも知れないけど、貴女は人を引き寄せて放さないオーラを持っているの。」

「言わば、適材適所って所かな…」

「嫌だと言っても無理なのでしょうね、それ…」

「うん、ごめんね。もう既に運命の歯車は回り始めてしまったから」

姉さんがそう言うと、質問する間もなく、舞台は暗転した。

雨の日。

「千早さま……」

悲しそうな声でメイドさんが声を掛ける。

あれ？この子聖應で見た気がする。

「史、少し席を外しててくれない？」

「承知、致しました」

『この男の子の名前はチハヤって言うの、そしてこの子は、不登校をずーとしてているの』

姉さんが説明してくれる。

私は声を出せない。理由は分からない。

基本的に夢の中なので、自分は観客でしか無い。

『切欠は多分、些細な何かだったとは思うの。でもその些細な何かがこの子の禁忌に触れてしまったのよね』

『本人がそれに気が付いた時点で、既に手遅れだったみたい。この子は学校の中で孤立してしまっていたわ』

『学校って言う場所は、言わば閉ざされた空間。どんなに気に入らない相手であろうと、毎日顔を見なければいけない。そんな事とか、言葉が他人を見下しているとか、姿形が女性っぽいとか、そんな疎外される要素をこの子は持ってしまったの』

『そして本人も捻くれてしまって、その後は、さしずめ下り坂を転がっていくボールの様な状態だったわ』

『クラスメイト達との関係悪化も急速に増え、無視や嫌がらせなんかになるのは、非を見るより明らかだったわ』

その寂しそうな顔を見た時驚いた。

以前、薫子お姉さまが道で助けた彼女では無いか。

あの人が千早さんなのか。

運命の齒車。姉さんはそう言った。

あの時に既に、その齒車は回り始めてしまったらしい。

『こんな言い方はどうかと思うけど、咲ちゃんも苛めにあった人の辛さは体験している筈』

まあ、確かにその気持ちは理解もするし、同情も出来る。

でもね姉さん。

何故聖應に入る事になるのですか？

「入りますよ」

千早のいた部屋がノックも無しに開かれ、30歳位の黒髪の女性が入ってきた。

「母さん……」

「千早ちゃん……何時までそうしているの？」

答えは返ってこなかった。

「千早ちゃん……」

母親は泣きそうになるのを堪えていた。

「ずっとこのままでは、貴方は前に進む事すら出来ないのよ？」

「それでね……聖應に転入したらどうかしら？」

は？

「だからね……聖應に転入すれば良いと思うの」

へ？

「あの母さん、何を言って……？」

何を言ってるのかが分からないのでは無い。

その意味不明さが理解に苦しむ。

「聖應はとても良い学院だし、私も、サヤカ義姉さんもまりやちゃんもOGなのよ？」

論点がずれてない？

「あのね母さん。聖應は女学院ですよ？僕が入れる訳が「そんな事

…千早ちゃんは美人さんだもの、
きっと皆に大歓迎されるわ」「

「そう言う問題じゃな――――――
―――い」

遂に千早さんがキレた。

「決めました。貴方は聖應に編入して、無事に卒業するのです。
もし出来なかった場合は、貴方を勘当します」

「良いですね？」

序章第四話（前書き）

未だに前作が、一日平均3〜40件アクセスさせている事実にはびびってしまいました。

序章第四話

千早さんの聖應の入るまでの話は終わったが、姉さんの見せる物語はまだ続く模様である。

千早さんが、学院長室に入る所から次は始まる様だ。

ノックして帰ってきた声は、私の知る学院長の声では無かった。

声だけで判断すると、まだ若い。

千早さんが部屋に入ると、そこにいたのは梶浦かじうら 緋紗子ひさこ先生がいた。

あれ？梶浦先生は退職したって聞いたけど…どうなってるの？

「始めまして、お話は伺っています。貴方が御門千早君ですね？」

「私は、学院長代理の梶浦 緋紗子です。美倉学院長は現在入院加療中で、その間の業務を私が代わりにお引き受けしています」

「随分とお若い代理ですね。梶浦先生」

千早さんが皮肉っぽく言葉を返した。

「ええ、そうですね。私も頼まれた時はとても驚いたのですが、美倉学院長お世話になりましたから、多少の御恩でも返せればと思ひましてね」

なるほどね。

「やう」

梶浦先生が千早さんと、一緒にいる女生徒を見つめ、言葉を続けた。

「ふふ、それにしても、御門さんの周りには美少年が多いのね。血筋なのかしら？」

これって遠まわしに宮小路 瑞穂さんの事を言っているよね…？

「…？何の話です？」

千早さんには通じてない模様だった。

「千早君の事ではないの。御門まりやさんって貴方の従姉妹に当たるのよね？私の教え子だったのよ」

「聞いていたお話から想像していたのとは、少し違う性格の様ですね。御門千早君」

「はあ……一体どの様な楽観的な話を聞かされていたのかは知りませんが、出来るのならその愚行にとっと気が付いて、今からでも取りやめて欲しいものなのですが…」

無駄っぽい抵抗を続けるが、なんだかんだで聖應に「女性」として入る事になり、寮に来る事になったらしい。

一緒にいた女生徒、名前を度會 史。彼女も千早さんの侍女として寮に入るらしい。

『私が現状で咲ちゃんに見せられるのは此処までね。彼（彼女？）は貴方が目を覚ます頃には寮に来るわ。千早さんには女生徒の上級生として接して上げてね？』

そして、彼（彼女？）と、史さんが間もなくやってくる。

寮の呼び鈴が鳴った。

ついに登場ですか…

薫子お姉さまがたまたま玄関にいたので、対応する様だ。

私は話をスムーズにさせる為にも、初音お姉さまの部屋のノックをする。

「司です。初音お姉さま、お客様が来ましたよ」

「はい。今出ますね」

そして玄関では

「「あ、貴女は…」」

薫子お姉さまと彼？の言葉がハモっていた。

「あら何？二人とも知り合い？」

香織理お姉さまが二人にそう聞いていた。

「いや、知り合いつて訳じゃないんだけど…」

「…先日は、助けて頂いて、有難う御座いました」

似非っぽい笑顔を出す千早さん。

作り物の笑顔に見えるのは、姉さんの見せてくれたあの夢の所為なんだろな…

それにたじろぐ薫子お姉さま。

「え、いや、その、別に…」

「助けた？」

初音お姉さまもその話に混ざって行った。

「はい。町で男性に声を掛けられて困っていた所を、助けて頂いたんです」

言ってる事は間違っていないけど、経緯が違くありません？

「お姉さま達、そんな所で井戸端会議をなさるおつもりですか？」

「あ！いけない私とした事が、リビングへ案内しますので上がって下さい」

「はい」

千早さんが私の方を見る。

「いっぞやはどうも…折言った話や自己紹介は改めてと言っ事で」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3108y/>

乙女の世界に飛び込んで --- Second season 『二人の銀の姫』 ---

2011年12月11日10時51分発行